

論文審査の結果の要旨

氏名 瀧上 舞

本論文は7章からなる。第1章では、アンデス地域における生業の特徴とその生態学的な背景が概説される。とくにインカ期にスペイン人によって残された歴史文書にも記録されており、当地における特異な複合的生業とされる垂直統御と、食料資源として抱けて無く祭祀や政治的な贈与品としても用いられるトウモロコシについて、従来の見解とその問題点を指摘した。

第2章では、古人骨やミイラ頭髮における軽元素同位体比を用いた先行研究を総説し、これまでに考古学から指摘された、形成期からインカ期にいたる生業の時代変遷と同位体比による食性復元の現状と問題点が指摘された。まず、各地域において報告されている同位体データについて、その傾向と遺跡の考古学的な背景に基づく解釈をまとめ、それぞれの時期についてどのような地域的な多様性が認められるかを検討している。炭素・窒素同位体比それぞれについて、各時代における前時代からの変化を中央アンデス全域のデータを用いて統計学的に検討することで、中央アンデスにおける適応戦略とくに垂直統御とトウモロコシのコントロールについて、炭素・窒素同位体比でどこまで明らかにされているのか、その時代変遷を復元するためにどの時代・地域のデータが不足しているかを議論した。

第3章では、北部山岳地域に位置するパコパンパ遺跡に着目し、先土器期～草創期（1期）から前期ホライズン（2期）にかけての時代変遷、とくにトウモロコシ利用の増加が単一の遺跡でも認められるかどうかを、遺跡から出土した古人骨ならびに動物遺存体の炭素・窒素同位体分析から検証した。また、個別埋葬人骨と散乱人骨、上流階級の習慣とされる頭蓋変形の有無、金属製副葬品の有無で食性を比較し、2期に導入されたトウモロコシは必ずしも上流階級によって祭祀や政治的に利用されていたのではないことを示した。

第4章では、インカ帝国の首都であり、政治の中心地であったにも関わらず、これまで分析事例が極めて少ないナスカ地域を中心に、後期ホライズン（インカ期、6期）の古人骨の分析を行い、インカ期に歴史文書で指摘されたトウモロコシの流通コントロールや、海岸部と山岳部の間での資源交換などが

起こっており、それまでの時代よりも広域に食性が近似する現象が見られることを、古人骨の同位体分析によって初めて示すことに成功した。

第5章では、地方に独自の王国が発展したと考えられる後期中間期（5期）についても、南部山岳地域と南部海岸地域から出土した古人骨の炭素・窒素同位体比を測定し、後期中間期には山岳地域と海岸地域では全般的に差異が大きいが、南部ではお互いに近似する食性を有していたことが示され、後期ホライズンに報告されている垂直統御が後期中間期に地域的に始まっていた可能性が示された。

第6章では、本研究で新たに測定した古人骨の炭素・窒素同位体比と、先行研究のデータを統合して、中央アンデスにおける食性の時代変遷を総合的に検討した。その結果、考古学的に指摘されている文化的多様性と、食性の多様性は一定の対応を見せることが示されたが、後期ホライズンについて残された歴史文書の記述が適応できる時期はそれほどさかのぼらない可能性が明らかになった。今後、考古学的な解釈にも影響する、重要な結果であると評価できる。

付録では、本研究で分析した古人骨について、放射性炭素年代を実施した結果と、それに基づく帰属年代についての議論が示されている。

なお、本論文の第2章は関雄二、鶴澤和宏、米田穰との、第4章は Izumi Shimada、Sarah Munro、篠田謙一、向井人史、大森貴之、松崎浩之、門叶冬樹、米田穰との共同研究であるが、論文提出者が主体となって分析及び検証を行ったもので、論文提出者の寄与が純分であると判断する。

したがって、博士（生命科学）の学位を授与できると認める。

以上 1566 字